幼児の寄付行動における他者の特性の影響

筑波大学¹ 川 島 一 夫

Effects of characteristics of another person on donating behavior
in children

Kazuo Kawashima (*Institute of Psychology, University of Tsukuba,
Niihari-gun, Ibaraki 305*)

Children's donating behavior was examined in presence of another person of different characteristics. The children were 5 $\frac{1}{4}$ to 6 $\frac{1}{2}$ years old. Results revealed, first that children with a female teacher, i.e., a familiar female adult, made the biggest donation. Second, the prediction that children would give more with a child of the same age than with an adult was not supported. Third, less donation was made in presence of a male teacher, i.e., a familiar male adult, as compared with lone trials. Our interpretation was that the male teacher had given a coercive impression to the children in kindergarten.

Key words: altruism, donating behavior, bystander, kindergarten children.

愛他行動 (altruistic behavior) についての多くの研究は、それが人間にとって基本的な動因であると考え、種々の状況下での愛他性に関する変数を操作している。川島の研究 (1980 a) では、幼児を被験者として3種の学習条件によって寄付行動を獲得させた後に、他者の存在する場面と単独場面という2つの状況の下で“かわいそうな”子どもへの寄付行動に及ぼす影響が検討された。その結果、モデルの観察、直接教示、モデルの観察+直接教示の3つの条件のうち、直接教示によって学習し、単独で寄付をする群で最も寄付量が少なかった。一方、他者がその場面に存在する時には、多くの寄付が行なわれた。この結果は、他者の存在が、寄付をする子どもの、場面に対する不安やストレスを低減するために、多くの寄付行動がうながされたと解釈された。しかしこの多くの寄付は、不安が低減されたというよりも、誰かが見ているからという他者からの期待や“よい子”として行動するようにというような社会的に要請された基準 (norm) に従おうとする社会的責任感によるものであるかもしれない。この点に関して Berkowitz & Daniels (1964) は、社会的責任 (social responsibility) が援助行動の基礎となり得ることを確認している。

川島 (1980 a) は、他者の存在が寄付行動をうながしたという結果について、それが不安の低減と社会的責任のいずれによるものかを明らかにするためには、例えば寄付行動を観察する他者として緊張や不安を低減させ得る親しい友人と、その可能性の少ない教師や見知らぬ大人などとの比較が必要であることを指摘している。しか

し、幼児の寄付行動場面で、側にいる他者の親密度が高いとしても、それが教師の場合には社会的責任の効果が強くなると考えられる。なぜなら、日常の保育の中で、教師は、道徳的規範としての社会的責任を教えていると考えられるからである。本研究では、寄付行動場面で存在する他者として、毎日幼稚園で顔を合わせている担任教師が用いられた。この場合、寄付行動場面で教師の存在は、社会的責任による寄付行動を促進すると予測される。幼児の援助行動を児童や青年のそれと比較した Staub (1970) が述べているように、仲間がいる場面では、幼児や年少の児童は、そこでのストレスや恐れを仲間がいることで低減するために、多くの援助行動が誘発されると解釈している。それに対して、より年長の児童や青年の場合には、不適切な行動を行なった時に対する仲間からの非難の恐れが生じるために援助行動が抑制されてしまうと考える。これは幼児の援助行動場面で親密な他者が存在することは、それを促進することを意味している。

前の研究 (川島, 1980 a) では、寄付行動場面で側に存在する他者として大人の女性が使用された。しかし、幼児にとって、その他者の親密さの程度にかかわらず、同年齢であることは仲間として受け入れることがたやすくなると考えられる。すなわち、寄付行動の場面で同年齢の子どものみが側にいることは大人が側にいる時よりも不安を低くし、場面的な要因に影響されずに寄付行動を行なうであろう。

一般に、援助行動や寄付行動について性差があるであろうと考えがちであるが、児童の愛他行動については明

¹ 現所属 信州大学。

Table 1
Experimental groups

Group	Familiarity	Age	Sex of another person	Sex of subject	
F-A-m	Familiar	Adult	male	boy 4	girl 4
UF-A-m	Unfamiliar	Adult	male	"	"
F-C-m	Familiar	Child	male	boy 4	girl 4
UF-C-m	Unfamiliar	Child	male	"	"
F-A-f	Familiar	Adult	female	boy 4	girl 4
UF-A-f	Unfamiliar	Adult	female	"	"
F-C-f	Familiar	Child	female	boy 4	girl 4
UF-C-f	Unfamiliar	Child	female	"	"

らかではない (Rice & Grusec, 1975; Midrasky & Bryan, 1967). しかし, Hoffman & Leyne (1976) は, それについて女兒は明らかに男児よりも母親から大きな影響を受けるであろうし, また体罰によってしつけられるよりも言い聞かせられることによって養育されることが多いために, 他人の不幸や災害をより共感的 (empathic) に受けとめることのできる傾向を持っていると指摘している。

確かに幼児期においては, 男児でも女児でも父親に比べて母親といふことの方が多くであろうし, 幼稚園, 保育園でも教師のほとんどが女性である。したがって, ここで問題となるのは, しつけられる側の性差ではなく, 養育する側の性差であろう。それ故, 寄付行動をする場面にいつも慣れている女性が他者として存在するか, 男性がいるかは, 幼児の行動に影響を及ぼすと考えられる。

本研究の目的は, 援助を必要としている子どもに, 自分の得た報酬を寄付する場面で他者が存在する時, その他者の特性によって寄付行動が影響されるか否かを検討することである。同時に他者の存在が不安や恐れを低減するものとして働くのか, あるいは社会的責任感や義務へと行動を方向づける心理的な力として働くのかを明らかにしようとする。

以上の点を考慮し, 寄付行動場面に存在する他者の特性に関し, 本研究では次のような点が予測される。

1. 寄付行動をする機会が与えられた時, よく知っている (親密度の高い) 人物が存在する時には, 不安・ストレスの低減や社会的基準に従うことへの期待にかかわらず, 知らない人物 (親密度の低い他者) が存在する時より, 多くの寄付行動が見られるであろう。
2. 大人が寄付行動場面に存在する他者であるときには, 接触する機会の多い女性の方が, 男性よりも幼児の寄付行動に大きな影響力をもつであろう。しかし, そこで存在する他者が同輩の幼児である時には性差はあらわれないであろう。

3. 寄付行動を行なう時, たとえ, あまり親密でない子どもであっても, 同年齢の他者が存在する場合には, 大人が他者である時に比べてより多くの寄付が示されるならば, それは社会的基準に従うことへの期待によるというよりも, 不安や緊張の低減によるといえるであろう。

4. 各条件の組み合わせによってできた群の中で, 親密度の高い大人の女性 (担任の教師) が他者である群はもっとも多くの寄付行動が見られるであろう。

方 法

被験児

この種の実験に参加した経験をもたない東京都内の私立A幼稚園児 96名 (男女各 48名ずつ) が選ばれた。被験児の年齢範囲は5歳3か月から6歳2か月であった。被験児は3つの条件の組み合わせによる12群に無作為に分けられた。

実験計画

2×2×2の要因配置法が用いられた。第1の要因は寄付行動が要求される場面に存在する他者に対する親密さの程度である。この要因に関しては他者が親密である条件 (以下F条件と略す) と親密でない条件 (以下UF条件と略す) が構成された。第2の要因は, 他者の年齢である。この要因に関しては, 同年齢の幼児 (以下C条件と略す) と大人 (以下A条件と略す) の2条件が設定された。第3の要因は, 他者の性で男性 (以下m条件と略す) と女性 (以下f条件と略す) の2つの条件を含んでいる。親密度の高い大人の男性及び女性としては, 幼稚園の教師が使用された。女性の教師は被験児のクラス担任であり, 男性は体育担当で, 自由遊びの時間に遊んだりする教師である。また, 被験児と親密な子どもとしては, 被験児に“あなたのクラスで一番仲よしの男の子 (あるいは女の子) は誰ですか”という質問によって挙げられた子どもが選ばれた。見知らぬ他者については, 被験児に“この人 (あるいはこの子) を知っていますか”と

質問し、“知らない”ことが確認された。Table 1 は、その3つの要因と実験条件を示したものである。また、被験児の性差についてはカウンターバランスされた。

実験装置

前の研究(川島, 1980a)と同様に、報酬配出器と連動しているレバー引き装置が用いられた。レバーは上から下に向かって40 cm移動できるものである。レバーの上方に赤色ランプ2個がとりつけられている。そのランプの点灯は実験者によって操作される。

被験児のための報酬として、1 cm×2 cm×1 cmのブロックが使用された。ブロックはそれを組み合わせて色々な形を作ることができる。報酬に対する動機づけを高めるために、そのブロックによって構成された自動車や家が被験児の前に置かれた。報酬として得られたブロックを入れるために、20 cm×30 cm×15 cmの箱が2個用意された。一方の箱には、涙を流している子どもの絵とともに、“かわいそうな子どものはこ”と書かれている。他方は、“わたし(あるいはぼく)のはこ”と書かれている。“かわいそうな子どものはこ”には、5個のブロックが初めから入れられている。

実験室には一方視のミラーがあり、隣の観察室から実験室を見ることが出来る。実験中、実験者は被験児を見ながらコントロールボタンによって刺激ランプを操作した。Fig. 1は実験室の配置を示したものである。

実験手続き

実験はすべて個別に行なわれた。被験児は実験室に入るとまずブロック積木を提示され、それで遊ぶよう指示された。その後、実験者は実験装置の前に行き次の指示を与えた。この指示は、すべての実験群に共通したものである。

Fig. 1. Experimental setting.

Note. Sub.: subject, A: another person, D: reward dispenser, L: lever, SL: stimulus light, T: block toys, M: oneway mirror, R: reward exit, B: boxes for rewards for subject and poor children, C: control button, Exp.: experimenter.

単独試行 “これからレバー引きのゲームを始めます。この赤いランプがついたら、このレバーを引いて下さい(ランプを指し、レバーを引いてみせる)。するとここ(報酬配出口を指す)から、いろいろな色のブロックが出てくる場合があります。でも、出てこないときもあります。じょうずにレバーを引くと、ブロックが出てきます。出てきたブロックは、この“ぼくのはこ”(女兒の時は“わたしのはこ”)か、“かわいそうな子どものはこ”のどちらかに入れて下さい。じぶんのものにしてあとで遊びたい時には、こっちの箱(“ぼくのはこ”あるいは“わたしのはこ”を指す)に入れて下さい。おもちゃを買ってもらいたくても買ってもらえないかわいそうな子どもにあげようと思うときには、こっちの箱(“かわいそうな子どものはこ”を指す)に入れて下さい。どちらの箱に入れてもかまいません。”

以上の教示の後、実験者は2試行だけ実際にレバーを引いて見せた。その場合、第1試行目にはブロックが出てくるが、第2試行目は出てこない。その後、実験者は被験児の実験開始をうながし、“私は用があって、向うの部屋に行きますが、ランプがついたら、このレバー引きゲームを始めて下さい。私のもどってくるまでゲームを続けることができます。”と言って、隣の観察室へ去った。

被験児は20試行レバー引きを行ない、その中12試行でブロックの報酬を受けた。この12回の報酬試行は、実験者によってあらかじめ決められており、第1, 2, 4, 6, 9, 10, 11, 14, 15, 17, 19, 20試行がそれに相当するように操作される。この誰もいないところでの試行における寄付数は、各個人の寄付率のベースラインとして記録された。

実験試行 単独での20試行に引き続いて、20回の実験試行が行なわれる。実験者は単独での20試行が終了すると同時に実験室に戻り、“ぼくのはこ”(あるいは“わたしのはこ”)に入っているブロックの数を確認した後、次のように教示した。

他者が子どもの条件下では、“こんどは〇〇ちゃんに見てもらいます。いまやったのと同じようにランプがついたら、じょうずにレバーを引いて下さい。”といい、同年齢の子どもを入室させ、実験者は退室する。また、他者が大人の条件下では、“こんどは、〇〇先生(あるいは〇〇さん)に見てもらいます。いまやったのと同じように、ランプがついたら、じょうずにレバーを引いて下さい。”と教示した。その際、もう一度、ゲームで得られた報酬を、“ぼくのはこ”か“かわいそうな子どものはこ”のどちらかに入れることを確認させた。

導入された他者は、被験児の左側に用意された椅子に座って、試行及び寄付行動を黙って観察した。他者は、子どもが同意を得るために他者を見たときにも、寄付行

Table 2
Means and standard deviations of donating scores

			Lone session		Experimental session	
			Adult	Child	Adult	Child
Familiar	Male	$\bar{X}$	5.75	5.83	5.75	5.00
		SD	2.38	1.86	2.89	2.51
	Female	$\bar{X}$	5.75	5.58	7.08	6.67
		SD	2.41	2.84	2.18	1.97
Unfamiliar	Male	$\bar{X}$	5.91	5.66	6.17	5.56
		SD	1.38	1.60	1.07	1.26
	Female	$\bar{X}$	5.83	5.67	4.75	5.00
		SD	2.44	1.25	2.38	1.00

動に影響するような意志表示を行なわないように指示された。他者が存在する場面での 20 試行でも、あらかじめスケジュールが決められており、単独試行の時と同様に第 1, 2, 4, 6, 9, 10, 11, 14, 15, 17, 19, 20 試行で報酬が配出されるように操作された。

実験終了後、実験者は“ぼくのはこ”(あるいは“わたしのはこ”)に入っているブロックを数え、ブロックはクラス全員のゲームが終了した時わたすことを約束し、クラスに帰ってから友達や先生に何をしたか話さないように口止めた。

結 果

各群の単独試行と他者の存在する状況下での各 20 試行における寄付数の平均と標準偏差を示したものが

Fig. 2. Means of donating scores for each group.

Table 2 である。そして、その各々について、2(他者の年齢)×2(親密度)×2(寄付行動場面での他者の存否)の角変換による分散分析を行なった。そのうち他者の存否の要因は被験者内の要因である。

その結果は他者の存否に関して 5 つの有意な交互作用が見い出された。すなわち、親密度×他者の存否 ($F=12.46$, $df=1/88$, $p<.01$), 他者の年齢×他者の性差×他者の存否 ($F=5.93$, $df=1/88$, $p<.05$), 他者の年齢×親密度×他者の存否 ($F=16.366$, $df=1/88$, $p<.01$), 他者の性差×親密度×他者の存否 ($F=40.19$, $df=1/88$, $p<.01$) はいずれも有意であった。

すべての要因間の交互作用が有意であったことから、各群間について、Tukey 法による分析が行なわれた。Table 3 は、各群の間の寄付数の差と Tukey 法による分析で有意差のみられた群の関係を表わしている。単独試行については、各群間に全く差はみられなかったが、実験セッションでは多くの差が見い出されている。特に F-A-f, UF-A-f, F-C-f, F-C-m の各群は、他のほとんどの群との間に有意な差が認められた。

Fig. 2 は、単独試行と実験試行の寄付数の変化を示したものである。そこから明らかなように、F-A-f 群と F-C-f 群は、単独で寄付を行なう場合より、他者の存在する場合により多くの寄付を行なったといえるであろう (F-A-f: $D=6.70$, $WSD=5.24$, $p<.01$, F-C-f: $D=6.61$, $WSD=5.29$, $p<.01$)。それに対して UF-C-f 群と F-C-m 群では、実験試行での寄付数の有意な減少が

Fig. 3. Means of donating scores for major variables. See Fig. 2 for symbols.

Table 3
The difference of donating scores and significance level for each group

			Lone trials						Experimental trials					
			Adult			Child			Adult			Child		
			Familiar	Unfamiliar	Familiar	Familiar	Unfamiliar	Unfamiliar	Familiar	Unfamiliar	Familiar	Unfamiliar	Familiar	Unfamiliar
Experimental trials	Adult	Familiar	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f	m	f
			1.56	1.12	1.92	0.57	0.51	0.06	0.08	1.00	8.26	2.34	7.17	4.00
	Unfamiliar	male		0.44	0.36	0.99	2.07	1.50	1.64	0.56	6.70	0.78	8.73	5.56
					0.80	0.55	1.63	1.06	1.20	0.12	7.14	1.22	8.29	5.12
Experimental trials	Child	Familiar				1.35	2.43	1.86	2.00	0.92	6.34	0.42	9.09	5.92
							1.08	0.51	0.65	0.43	7.69	1.77	7.74	4.54
	Unfamiliar	male						0.57	0.43	1.51	8.77	2.85	6.66	3.49
									0.14	0.94	8.20	2.28	7.23	4.06
Lone trials	Adult	Familiar	**	**	**	**	**	**	**	**	7.26	1.34	8.17	5.00
			**	**	**	**	**	**	**	**		5.92	15.43	12.26
	Unfamiliar	male	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	9.51	6.34
			**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	*	3.17
	Child	Familiar	**	*	**	*	**	**	**	*	**	*	*	**
			**	**	**	**	**	**	**	**	*	**	**	**
	Unfamiliar	male	**	**	*	**	**	**	**	**	*	*	*	**
			**	**	*	**	**	**	**	**	**	**	**	**

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$.

みられた (UF-A-f: $D=9.09$, $WSD=5.24$, $p<.01$, F-C-m: $D=4.54$, $WSD=4.00$, $p<.05$).

他者の性差×親密度×他者の存否の交互作用が有意であったことから、他者が女性である場合、実験試行におけるF条件下で行なわれた寄付は、UF条件下で行なわれた寄付よりも有意に多いことが明らかにされた (Fig. 3-I). また、他者の性差×他者の年齢×他者の存否の交互作用が有意であったことから、年齢と親密度との間にも同様の傾向がみられる (Fig. 3-II). 他者の年齢×親密度×他者の存否の交互作用が有意であったことは、Fig. 3-III から明らかのように、F条件下で実験試行で寄付数が増加し、UF条件下では減少したことによるものと考えられる。

次に、実験試行での寄付数から、単独試行における寄付数を引いた修正寄付数について、2 (他者の年齢)×2 (他者の性差)×2 (親密度) の分散分析が行なわれた。その結果、他者の性差と親密度の交互作用が有意であることが見い出された ($F=8.53$, $df=1/88$, $p<.01$).

そこで、各群間の差を明らかにするために、Tukey法による分析が行なわれた。他者の年齢要因をこみにして、F-m, F-f, UF-m, UF-f の4群間について分析したところ、UF-m群とF-f群 ($D=11.59$, $WSD=11.48$, $p<.01$), F-f群とF-m群 ($D=8.52$, $WSD=8.50$, $p<.05$)の間にそれぞれ有意な差がみられた。すなわち、実験試行において、UF-m群やUF-f群のF条件と比較して、F-f群では有意に寄付が増加し、F-m群では減少した。このことから、F条件下では、導入された他者の性差によって寄付数が大きく変化するのに対して、UF条件下では影響されないといえるであろう。

また、被験児の性については、実験試行における、被験児の性差を含めた分散分析が行なわれたが、どの要因についても有意な差は見られなかった (被験児の性, $F=0.452$, $df=1/88$, 被験児の性×他者の性, $F=0.11$, $df=1/88$, 被験児の性×親密度, $F=3.87$, $df=1/88$, 被験児の性×他者の性×親密度, $F=0.998$, $df=1/88$, いずれも $p>.05$).

考 察

本研究の結果から次の点が明らかにされた。すなわち、第1に、予測1.のように、幼児はよく知っている (親密度の高い) 人が側に存在する方が、知らない (親密度の低い) 人が存在する時に比較して、多くの寄付行動を行なうことがわかった。また、他者が女性の方が男性に比べて有意に多く寄付を行なうことが明らかにされた。

次に、他者が大人である時には、幼児が日常生活場面で接触する機会の多い女性の方が、男性より寄付行動に対してより大きな影響を及ぼすであろうという予測

2. は支持された。すなわち、他者が大人であるか、子どもであるかにかかわらず、女性が存在する時により多くの寄付行動が見られたのである。しかし、これは、その女性に対する親密度が高い場合にのみ見い出された結果である。これは、寄付行動場面に存在する他者に対する親密度が高い場合、女性は男性より幼児の寄付行動に強い影響を及ぼすことが明らかになったといえよう。このことは、親密度との関係からいえば、養育者としての母親や幼稚園の教師から女性全体に般化された親密さが男性よりも高いためであると考えられるであろう。

この種の親密度に関連して、Staub(1971)やWeissbrod(1976)は、養育性が後の援助行動を増加することを明らかにしている。本研究における親密度の高い女性は、被験児のクラス担任の教師として、一般に養育性の要素を含んでいると考えられる。その点で親密度の高い女性が存在する時、多くの寄付が行なわれたという本研究の結果は、Staub (1971) や Weissbrod (1976) の研究結果と一致しているといえるであろう。その理由として Staub は、大人の養育性は子どもをより気楽にさせ、行動の自由さを増加すると考えている。これは養育性が不適切行動への非難に対する不安やストレスを低減するといえるであろう。しかし、本研究で使用されたような幼児については、Beaman, Fraser, Diener, Kelem, & Westford (1974) が述べているように、ただ単に見られているということから生じる社会的基準からの圧力によって寄付が増加したと考えた方が理解しやすいように思われる。

寄付行動が行なわれた時、同年齢の他者が存在する場合には、大人が他者として存在する時に比べてより多くの寄付が行なわれるであろうという予測3. については支持されなかった。このことは親密な他者が存在することによる寄付の増加が、Beaman et al. (1974) のような社会的責任感によるのか、Staub (1971) の指摘するような不安やストレスの低減によるのかは明らかではない。しかし、他者の年齢という要因は、親密度との関連において寄付行動に影響を及ぼす傾向がみられた。すなわち、他者が男性である場合、大人が存在する方が、子どもが存在する時に比べて、より多くの寄付が行なわれる傾向がみられた。

本研究に参加した被験児の年齢段階では、社会的に不適切な行動への他者からの非難に対する不安や恐れが低いために、社会的責任に基づく愛他性は、まだ十分には発達していないと考えられる。しかし、この年齢においても、愛他性の基礎となるような適切な社会行動のルールに従おうとする傾向はみられた。すなわち、本実験で20試行中12試行で、報酬としてブロックが与えられた時、どの群の子どもも12試行中平均5個から6個のブロックを寄付した。このことは、幼児がそれを持っていないものに平等にブロックを分けるという社会的なルー

ルに従おうとする傾向をすでに持っていることを示唆するといえよう。

予測 4. に関しては、幼稚園での担任の教師が他者として側にいる時、最も多くの寄付が行なわれることが明らかにされた。これは前述のように、一種の社会的規範を代表するものであると同時に日常よく親しんでいる女性であるという両条件の二重の効果によるものと考えられる。

Staub(1974)によれば、適切な社会的行動のルールについて、大人が強制的に教示したり説教したりすれば、他者による評価に対して過剰な関心を持ち、また不適切行動に対して恥の感情を抱くようになるかもしれないとしている。本研究では、親密な大人の女性が存在する時には、最も多くの寄付が見られたのに対し、親密な大人の男性が存在する時には、単独での試行と比較して、寄付数が有意に減少したのである。このことは、保育の中で男性教師が女性教師と同様に親しんでいると考えられるにもかかわらず、男性教師は保育中、適切な社会的行動を教えるための教示などに、“強制”という印象が含まれてしまっているためではないかと推測される。川島(1980b)は、モデリングと直接教示を使用して、外的圧力の認知についての強制的印象を操作している。その結果、幼児は“かわいそうな子ども”への寄付を行なう機会が与えられた時、外的圧力の認知が強制的であるという印象をうける直接教示条件下でよりも、それがあいまいであると感じられるモデリング条件下で、より多くの寄付を行なうことが明らかにされた。その結果を考える時、本研究の男性教師が他者として存在する時に寄付が減少したことは、男性教師の用いる教示などに対する印象が強制であったことを裏づけしているように思われる。

社会的基準の役割について、Staub(1978)は、愛他性を発揮するような場面には、そこで応用され得る対立したいくつかの基準があり、特定の1つの基準がその行動を決定するということはあり得ない、と述べている。本研究で操作されたような寄付行動場面に存在する他者の特性の影響についても、そのほとんどが交互作用として示されたことは、1つの基準が一定の基準を作り出すのではなく、組み合わせることで、いくつかの基準をつくり出し、それがその場面によってとりあげられるのではないかと考えられる。さらに Staub(1978)は、もし特別な期待が一般的に期待される行動の基準と対立する場合には、その場面での特別な期待によって行動が決定されると述べている。これは本研究でいえば、担任の先生との関係において各個人の持つ行動基準が、寄付行動に対する社会的な一般的基準よりも効果を持つということであろう。したがって、担任の教師が他者として存在する時に最も多くの寄付がみられたことは、幼児の寄付行

動に対する特別な基準の効果であるといえるであろう。

本実験では、寄付行動場面での他者の存在について、被験児に対する他者存在の理由、すなわち他者がなぜ側にいるのかについて、子どもへの説明をもっと自然な形で行なうべきであったかも知れない。今後、寄付行動場面で存在する他者に対する子どもの認知の仕方について、もっと検討する必要がある。

要 約

本研究は子どもの寄付行動が、その場面に存在する他者の特性によって影響をうけるかどうか、また、寄付行動が他者の存在によって促進されるならば、それが不安や恐れという場面的変数の低減によるのかあるいは社会的基準に従おうとする社会的責任感によるのかを検討するために計画された。

96人の幼稚園児はレバー押しゲームで得た報酬を、他者の存在する状況と、存在しない状況でかわいそうな子どもにブロックを寄付する機会が与えられた。

結果は、寄付行動の機会が与えられた時、幼児はよく知っている人が側に存在する時に知らない人が存在する時と比較して多くの寄付を行なうという予測 1. を支持した。それは特に、他者が女性である時に大きな差をもって示された。

寄付行動場面に存在する他者が女性である時、それは母親とかクラスの担任教師という形で接触する機会が多いために、男性が存在する時よりも多くの寄付が生じるであろうという予測 2. は、存在する他者の年齢にかかわらず支持された。これは親密な女性が他者として存在することは、幼児の寄付行動に大きな影響をもつことが明らかにされたといえるであろう。

寄付行動場面に存在する他者の年齢について、同年齢の子どもの寄付行動場面で存在することは、大人が他者として存在する時に比べて多くの寄付を行なうであろうという予測 3. は支持されなかった。

他者として、クラス担任の女性教師が存在する時に、最も多くの寄付がみられた。それに対して、親密な大人の男性が存在する条件下では、幼児は単独での試行と比較して、寄付行動が有意に減少した。このことは、保育の中で女性教師と同様に親しんでいると考えられるにもかかわらず、男性教師は、適切な社会的行動を教えるための教示などに“強制”という印象が含まれているためではないかと推測された。

引 用 文 献

- Beaman, A.L., Fraser, S.C., Diener, E., Kelem, R.T., & Westford, K. 1974 The effects of evaluation apprehension and social comparison on emergency helping behavior. Unpublished manuscript, University of Montana.

- Berkowitz, L., & Daniels, L.R. 1964 Affecting the salience of the social responsibility norm. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **68**, 302-306.
- 川島一夫 1980 a 幼児の寄付行動の獲得における学習形態と他者の存在の影響 心理学研究, **50**, 345-348.
- 川島一夫 1980 b 幼児の寄付行動の学習における帰属の影響 教育心理学研究, **28**, 83-87.
- Hoffman, M.L., & Levine, L.E. 1976 Early sex differences in empathy. *Developmental Psychology*, **12**, 557-558.
- Midlarsky, E., & Bryan, J.H. 1967 Training charity in children. *Journal of Personality & Social Psychology*, **5**, 408-415.
- Rice, M.E., & Grusec, J.E. 1975 Saying and doing: Effects on observer's performance. *Journal of Personality & Social Psychology*, **32**, 584-593.
- Staub, E. 1970 A child in distress: The influence of age and number of witnesses on children's attempts to help. *Journal of Personality & Social Psychology*, **14**, 130-140.
- Staub, E. 1971 A child in distress: The influence of modeling and nurturance on children's attempts to help. *Developmental Psychology*, **5**, 124-133.
- Staub, E. 1974 Helping a distressed person: Social, personality and stimulus determinants. In L. Berkowitz (Ed.), *Advance in experimental social psychology*, Vol.7. New York: Academic Press. Pp.293-341.
- Staub, E. 1978 *Positive social behavior and morality: Social and personal influences*. New York: Academic Press.
- Weissbrod, C. 1976 Noncontingent warmth induction, cognitive style, and children's imitative donation and rescue effort behavior. *Journal of Personality & Social Psychology*, **34**, 274-287.

——1980.7.17. 受稿, 1982.1.9. 受理——